死ぬまでは

みうら　しの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死ぬまでは

【Ｎコード】
Ｎ１７６０ＢＡ

【作者名】
みうら　しの

【あらすじ】
クリスマスの日に起きた悲惨な一家心中。
その中で唯一生き残り、自分が母を殺したのだと自責の念に追いつめられ、自殺を図る１７歳の少女、渡辺沙奈。
しかし、唯一無二の親友を目の前で失った少年、工藤竜也に出会い、生きる希望を見つける。
大切なものを守れなかった２人が、悲しみを背負ってまで生きる意味。

1

地獄だった。

薄暗いリビングで、母が私へ包丁を向けた。頭の中はパニックを起こして、目の前の現実を受け入れられなかった。ただ、外から帰ってきたばかりのかじかんだ手が震えた。

窓から差し込んだ青白い光と、テーブルの隅に寄せられた小さなクリスマス・ツリーの豆電球が、いつもより柔らかく室内を照らしだす。長い黒髪が邪魔をして、母の顔は見えなかった。

「疲れちゃった」

母の言葉には何の感情もこもっていない。ボソボソとした発音で、声色は深い闇に満ちていた。包丁の先端を私の喉元に向けたまま、母は近づいてくる。一歩ずつ、ゆっくりと。

「死にたいよ」

母の足元には、まだ4才になったばかりの妹がうつ伏せに横たわっていた。素直で明るくて、とても優しい子だった。大きくなったら3人でディズニーランドに行こうね。そう言っていた私の可愛い可愛い妹。そして母の愛しい次女だったはずだ。しかしもう、恐らく死んでいる。

「……お母さん……」

私がそう言うが早いか、お母さんは悲鳴を上げて包丁を振り下ろした。咄嗟に身を引き、なんとか避けては、背中を丸めて頭を低くしながら台所へと逃げ込んだ。恐怖で足が言う事を聞かない。半ば倒れるようにして冷蔵庫の陰へと隠れ、激しく震える肩をぎゅっと抱いていた。全てが夢であってほしいと、血がにじむほど唇を噛んだ。

少しするとリビングから母のすすり泣く声が聞こえた。私の震えはふと止まり、恐る恐る全身の力を抜く。父が死んで以来、聞いた

事のなかった母の泣く声に、全感覚を集中させた。
私はそっとリビングを覗いた。母はテーブルの上の小さなクリスマス・ツリーの前で座り込んでいた。包丁は床に置き、両手で顔を隠していた。弱々しく光を放つそれは、去年私と母が妹に買ったものだった。ねじを回せばオルゴールにもなるそれを妹はすごく気に入って、いつもジングル・ベルの曲をかけては一緒に歌っていた。
「お母さん……？」
私は母の隣にしゃがんで、背中をさすった。母はこんなに痩せていたのか。
「貧しくたって、お父さんがいなくたって、平気だよ。生きていればなんとかなるよ、そうでしょう？お母さん……」
「優花はもう死んでしまった。私が殺してしまった。もう遅いわ、何もかも……」
母は呼吸を止めた。そしてゆっくりとこちらを向き、私を見つめた。瞳に光はなかった。
その瞬間だった――母は私の首を絞め、押し倒した。クリスマス・ツリーはテーブルから転げ落ち、私の顔の横でか弱くジングル・ベルを鳴らし始めた。
ツリーのむこう側に、妹の細い腕が見えた。血がついていた。その光景に吐き気がした。母がさらに強く力を込めると顔が熱くなり、目が飛び出しそうになり、全身の血管がドクドクと脈うつのがわかった。
もう死ぬかもしれない。そう覚悟した。遠のく意識の中、私は必死にもがいた。そして指先に刃物が触れた。私は無我夢中でそれをつかみ、咄嗟に母に押しつけてしまった。
さくっという生々しい感覚。包丁は簡単に母の内臓を突き破った。母の腕の力はすっと抜けて、私は咳き込んだ。
生か死かの選択だった。私が、というよりも、母が生きるか、私が生きるかの。しかし咄嗟の判断とはいえ、取り返しのつかない現実を作った瞬間だった。昨日までの幸せな日常は、二度と戻らない。

母と妹と私の、三人の、幸せな時間。
目の前の夥(おびただ)しい量の血は私の制服を濡らした。夢ではなく、全て現実だ。逃げられない、背負わなくてはいけない、哀しい現実。母の腕の力はすっと抜けて、私は咳き込んだ。母は声も出さずに苦しそうな顔をして、私の上に倒れ込んだ。そして耳元でそっと囁くと、そのまま動かなくなった。

途切れ途切れに鳴っていたジングル・ベルの音楽が、ふいに止まった。

2

早く高校生を終えたい。高校生ってどうしてこう、キラキラ輝いているんだろう。何気ない毎日が至福の時のように、なんて幸福そうな顔をしているんだろう。みんなそれぞれ、小さな幸せとか小さな不幸せとかを寄せ集めて、継ぎ接ぎの宝物を持っている。この価値は自分にだけわかればいいと、胸を張っている。

私はそんな高校生でいることを疎ましく思っていた。太陽の日差しの中に、暗く重い陰を作ってしまう自分が嫌だった。誰かの輝きを邪魔をしたくなかった。消えたいと思った回数は、指が何本あっても足りない。

一人で登校して、黙って授業を受けて、一人でお弁当を食べて、一人で帰る。それが私の当たり前の日常だった。だって、母を殺した私は、幸せになんかなれない。必要最低限のものだけを選択して、細々と生きていくのしかないのだ。

私は、母を殺した罪を償えなかったのだ。法律は本当の意味で私を救ってはくれなかった。「正当防衛」のたった四文字が私を絶望させ、今もなお心の奥に残る大きな重りをぶら下げていった。そして最も私を追い詰めたのは、周囲の同情だ。勝手に悲劇のヒロインに仕立て上げられ、可哀想だ可哀想だと囁かれた。この事件の中身を、誰もわかってはいなかった。私はたまらなくそれが嫌だった。可哀想なのは私じゃない、家族に殺された母と妹だ。

私のことは父方の祖母が引き取ってくれた。父が死んでからほとんど関わりがなかったから、まさかこの家に来るとは思わなかった。でも、よく考えてみればそれしか手段はない。母方の祖母の大切な娘を殺したのは、私なのだから。

私は学校が終わると、いつも野球部の練習を眺めていた。父は中学高校と野球部だったらしい。祖母がそう教えてくれてからは野球

に興味を持った。女の子だった私も、昔はよく父とキャッチボールをしていた。うまくキャッチできたとき、ニカっと笑う父が好きだった。

ボールがミットにはまる音、バットの甲高い金属音、誰かの怒鳴り声、野球にかかわるものは全部格好良いと思った。迫る夏の大会に向けて一生懸命な姿、土煙の舞う中で汗を流す部員、白い練習着がドロドロになっていく様、次々と内野を回る白球――いつまで見ても飽きなかった。

私は時々そうやって、野球部の練習が終わるまで見入っていることがあった。終わるのはいつも8時や9時だった。今日も最後まで見てしまい、慌てて帰ろうとしたとき、背後から声をかけられた。

「渡辺！」

振り返ると、真っ黒になった顔にくしゃっと笑顔を浮かべた、同じクラスの館山恒樹（たてやまこうき）だった。

「館山くん……」

学校でろくに口を聞いた事がなかったせいで、どんな表情で何を言えばいいのかわからなかった。館山の後ろにはひとつ上の先輩がニヤニヤと笑っていた。

「あ、あのぉ……な！」

館山は坊主頭をわしわしと掻いて難しそうな顔をした。そして突然思い切ったように叫んだ。

「俺お前のことが好きだ！」

「え！？」

あまりにも突然の告白に私は思わず口を大きくあけ、間抜けに館山を見上げた。

「その……なんつーか、無口なとこも、運動音痴なとこも、何気にすげー頭いいとこも、チビなとこも、ぼーっとしてるとこも、さりげなく優しいことするとこも、可愛いとこも……全部好きだ。あんまり関わったこともないしな、俺のことよくわからないと思うけど、これからお互いわかりあっていければなぁ……なんつって。あっ、

今じゃなくていいから、返事はいつでもいいからさ」
「は、はぁ……」
褒めているのか褒めていないのか良くわからない言葉の羅列に私は混乱した。とりあえず、彼が私を好いてくれているのだけはわかったが、恋愛なんてしたことのない私はどうしたらいいのかわからなかった。
「そ、それじゃ、また明日教室でな」
一方的にそう言うと、館山は先輩と共に帰って行った。私はそこに暫し立ちつくし、野球部員がいなくなったころ、家路に就いた。

3

次の日の朝、教室に入って、あと思った。そういえばこの間席替えをした時、館山の隣になったのだった。今日は気まずいからずっと窓の外を見ていよう。そう思いながら席に着く。館山も同じ気持ちなのか、大袈裟に私に背を向けていた。

今日は野球部の練習も見ないで帰ろう。昨日のように帰り際に出くわすなんて嫌だ。私は人を好きにはなれないし、好きになってほしくもなかったのに。

幸せに近づくということが怖かった。どうせ、いつか失ってしまう儚いものなのだから。

久しぶりに放課後すぐに帰った。茶の間には祖父と祖母、それと母の妹がいた。母の妹は私の父のことを相当嫌っていて、父方の祖父と祖母に関わろうともしていなかったのに、急にどうしたのだろう。それに3人ともかなり怒った顔をしていて、私のことに気がついていないようだった。

その光景を異様に思いながらも、部屋への階段を上がろうとした時だった。

「何よ今更！勝手に上がりこんできたと思ったらそんな昔の話掘り出して」

「昔の話？何が昔の話なんですか！私たちにとってはね、何年たっても昔のことだなんて割り切れないのよ！なおさらこんなことがあったなら、許せない！」

ただならぬ怒声に、私はこっそり言い合いの内容を聞いた。

「こんなことって何よ！何もしてないじゃない！あんたの姉はね、勝手に死んだの！」

「よくそんなこと言えるわね！お姉ちゃんのこと、精神的に追い詰

めて殺したの、あなた達だったんじゃない！」
「えっ……」
思わず声が出た。口からというよりも、直接心から零れたように感じた。
「お母さんを心中に追いつめたの……おばあちゃんとおじいちゃんなの……」
時が止まったように、動けなくなった。心臓がバクバクしてるのがわかった。
「ちょっと、人聞きの悪いこと言わないでよ。どうしてあんたの姉を私たちが殺したことにするのよ」
「お姉ちゃんの旦那が交通事故で亡くなった時、一緒に乗っていたお姉ちゃんが生き残ったから責めてたんでしょう？あんたが死ねばよかったのにって言ってたらしいじゃない！」
信じられなかった。あの優しい祖父と祖母が、母にそんなことを言ってるとは思えなかった。
「おいいい加減にしろ、帰ってくれ」
「その時は沙奈ちゃんも一緒よ！」
「ちょっと、何言ってるの？沙奈を引き取る気？」
「当たり前でしょ。お姉ちゃんにあんなことさせたのあなたたちなのよ？そんな人たちと一緒にいるなんて沙奈ちゃんが可哀想よ」
「……そうよ。あの女には確かにそう言ったわ。じゃあ言わせてもらうけど、あんただって優治のこと嫌っていたらしいじゃない。生き残ったのがお姉ちゃんで良かった。あの人と一緒にいても幸せになれないって」
「それは……そうだけど」
「そんな人と一緒にいて沙奈は幸せかしら？それに、あんたの姉を事実殺したのはあの子なのよ？あんたと一緒にいるなんて息苦しいに決まっているでしょうよ。それならよっぽどこっちの家にいた方が幸せよ。あんたなんてどうせろくに収入もなく遊び歩いているんでしょう？」

私は耐えきれず、割って入った。
「ねぇ、なんなのこれ」
3人とも目を見開いて私を見た。
「おばあちゃんとおじいちゃんはお母さんのこと恨んでたんだ。私にとっては大事な家族だったんだよ」
「……そんなの、おばあちゃんだってわかってるわよ」
「じゃあどうして、お母さんのこと苦しめたりしたの？私、幸せだったのに。お父さんの交通事故は仕方のないことじゃない。誰が悪いわけでもないし、辛いのはみんな一緒だったんだよ。お母さんだって辛かったんだよ。殺したくて殺したんじゃないよ！」
私は声を張り上げた。大粒の涙が次々と溢れてきて、止まらなかった。
「沙奈ちゃん……おばさんと一緒に行こう？」
母の妹に差し出された手を私は振り払った。
「行くわけないじゃん！馬鹿じゃないの！？あんたがお父さんのことそんな風に言ってるの、ずっと知ってたんだから！お母さんにお父さんの悪口言って、お母さんのことといつも困らせてたじゃない！お父さんが死んだときだって、陰でこっそり笑ってたの知ってるんだからね」
彼女は振り払われた手を抑えて、私を見つめた。
「……私、もう死にたい。本当はあの日に死ぬはずだったんだし。生きていたって、辛いだけだよ。おじいちゃんとおばあちゃんとも一緒にいたくない。叔母さんとも一緒にいたくない。」
「沙奈、ちょっと待って」
「何を待てっていうの？おばあちゃんの言い訳を聞くこと？それともおばあちゃんとおじいちゃんが死んでいなくなるのを？」
「沙奈！」
おじいちゃんが私の肩を掴んだ。私は力いっぱい睨みつけた。
「誤解だよ、そんなことするわけないだろう」
おじいちゃんの優しい声に、私はふっと息を吐いた。

「……違うの、おじいちゃん。もう……どうだっていいのよ」
「どうだっていいって」
「……おじいちゃんを信用するとか、叔母さんを好きになるとか、そんなことじゃないのよ。何が嘘で何が本当なのかなんて、どうでもよくなっちゃった。疲れたから、死ぬ。それだけ。もうごちゃごちゃ言わないで。私が死ねば全部リセットされること、そう思うわ」
「沙奈！」
「沙奈ちゃん！」
私はおじいちゃんの腕を無理に離すと、家を飛び出した。

4

私が向かった場所は学校の屋上だった。太陽は真っ赤に燃えて、西に大きく傾いていた。空は紺色から黄色までのグラデーションになっていて、月と一番星がうっすらと表れていた。風はまだ肌寒く、これから梅雨を誘ってくるのだろう、湿気った空気が頬にまとわりついた。

濃い夕暮れの香りを私はいっぱいに吸い込んだ。

「お母さん……ごめんね。もう耐えきれそうにないや。あの時、お母さんが私や優花を殺して死のうとした意味がやっとわかった。私も一緒に死ねばよかったよ。生きていられないね、こんな世界」

そうして私がフェンスに足をかけた時だった。

私のすぐ横に野球ボールが飛んできた。振り返ると金属バットを持った野球部員が一人立っていた。よく見ればそれは同じクラスの工藤竜也（くどうたつや）で、無表情で私を見つめていた。

私が呆気にとられていると彼は金属バットを振り上げ、襲いかかってきた。私は訳が分らぬまま、咄嗟に逃げ出した。校内へと続く階段へ向かって走りだしたがすぐに追いつかれ、腕を掴まれてしまった。そして彼は私をフェンスへ押しつけた。

「死にたいなら殺してやるよ」

冷たい視線に私は恐怖を感じた。足が震えてその場に座りこんでしまった。工藤竜也は表情を変えずに金属バットを振り上げた。私は身構えて叫んだ。

「やめてっ！」

しばらく目を堅く瞑っていた。しかし衝撃はいつまでも襲ってこない。私はそっと顔をあげた。

工藤達也は別人のように優しく微笑んでいた。彼は驚く私の前髪

に手を置き、言った。
「本当はさ……生きたいんだろ？」
「え……」
胸の中心らへんがきゅっと痛くなった。そしてじわりと温かくなる。ずっと心にあった氷が溶けていくようだった。言葉は何も出なかったけど、涙がぽろぽろと落ちた。
「よく頑張ってきたな」
彼は笑っていた。
「っ……うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
私は家族を失ったあの日以来、初めて大声で泣いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1760ba/

死ぬまでは

2012年1月6日16時46分発行